

歴史総合に期待するもの

古川 隆久

➤ の4月から「歴史総合」の授業が始まった。「歴史総合」の特色は、2点ある。
➤ 1つは、学習指導要領にいう「主体的・対話的で深い学び」、すなわち、生徒たち自身の調査や議論を授業のなかに大幅に取り入れること(アクティブ・ラーニング)、もう1つは、時期を近現代に限定したかわりに、従来からの科目でいえば「日本史」と「世界史」を融合した形になったことである。そこで、その2つの点について、「歴史総合」の教科書執筆にたずさわった1人として所感を記してみたい。

1 「主体的・対話的で深い学び」

「歴史総合」に限らず、新指導要領においてはどの科目でもそうになっているはずであるが、新しい教科書のなかには問いかけがあふれている。私が関わった教科書『歴史総合 近代から現代へ』(歴総707)でいえば、冒頭に大きな問いがあり、節ごとに問いがあり、さらに平均して1ページに1つ問いが設けられ、大きなまとまり(「部」)ごとに問いがある。教科書は、問いの答えを考えるための材料という位置づけになっているのである。しかも教科書のなかだけで答えを探せる問いばかりではない。資料集や史料集、さらには2次元コードで外部に材料を探すだけでなく、図書館やインターネットで考察のための材料を集めることが想定されている問いもある。もちろん、これは「主体的・対話的で深い学び」が大きな眼目になっているからである。

究極の理想論をいえば、この教科書の一番よい使い方は、「反転学習」の教材にすることである。つまり、節ごとやページごとの問いについて教科書や資料集、史料集をもとに生徒に自分の考えをレポートにまとめたものをあらかじめ用意させ、授業ではそれらを材料に生徒に議論させ、最後にその授業についてのコメントを書かせることである。「部」ごとの問いについては、班を組んで、調査、レジュメ作成、発表をさせてみなで議論するのである。教員の役割は最低限の気づきやアドバイスを与えることである。これが徹底できれば先生方はプリント作りから解放される!

歴史に関する知識や概念を、期末テストや大学受験が終わったら忘れてしまうような「暗記」の対象ではなく、「正しい方法」で使ってみることで、知識や概念を定着させ、日常生活や主権者として振る舞う際に活用できるようにすることが、高校に

おける歴史科目の大きな目標になったのである。

そんなことが実際にできるのか。私は大学の史学科に勤めていて、1年生必修の「史学概論」(前期)と「学問の扉」(後期)を担当している。後期の授業は全学共通科目が学部共通科目に改組されたもので、実質的には「史学概論」の応用編という位置づけである。「史学概論」は、科目の性格上、どうしてもある程度こちらが説明したりする講義的な部分があるが、反転授業の方法を取り入れて発問し、できるだけ受講者の発言で進める部分を多くするようにしている。「学問の扉」の方は、ひたすら受講者に討論してもらう(小グループにわかれてやる場合もある)時間になっている。教員の役割は毎回の話題(全員が取り組める話題であるから、書評や歴史哲学的なものが多い)と準備課題の発問(必ず何か文献を読んで書くことをルールとしている)、つまりは仕掛け作りと司会(あとできればフォローアップ)だけである。ただし、よい仕掛けをするためにも普段の研究は欠かせない。

このようになったのは、通り一遍の講義と期末テストだけでは、身につけてもらいたいこと(歴史学の基本的な考え方、方法論、概念など)がなかなか身につかないという現実への対応であった。

とくに「学問の扉」は、「史学概論」で身につけたはずの方法論や概念を活用してもらうことが眼目であるから、1つの正しい答えを出すのではなく、答えの正しい出し方、つまり、歴史学に限らず学問研究でもっとも大事な「批判的思考法」を実際にやってみて、身につけてもらうことが大事である。心理学でいう「利用可能性バイアス」(自分の思いつきだけで推論する)、「確証バイアス」(自分の考えを裏づける情報だけ採用し、反証するような情報を無視する)を回避する方法を学ぶのである。

実は、ついでに、歴史についてちゃんと根拠をもって議論することの楽しさも知ってもらえば、その後の専門科目の授業や卒論もより主体的に取り組みやすくなるであろうこともねらっている。そのため、根拠を明確にしたり、あえて逆の立場や違う立場に立って考えてみたりするようにしてもらい、教師はなるべく意見をいわない。冒頭や途中で教師が意見を口にすれば議論の流れを誘導することになりかねないからである。そして、無理に1つの結論にまとめない。まさに「主体的・対話的で深い学び」の方法を実践しているのであって、このスタイルは学生たちにも大好評である。

このように、知識は自分で使ってこそ身につくのは周知のことで、だからこそ、学習指導要領でも、ついにこれを基本にすえる方針が打ち出されたわけである。しかし、ほかの科目もあるので予習にそんなにたくさんの時間を使わせられない、授業時間も45分しかないのにそんなことができるか、議論が思わぬ方向に行ったらどうするのか、評価はどうするのか、という批判は当然出てくるであろう。もちろん、すべての授業が反転授業、教室では全部討論ということは現実的には難しいかもしれない。しかし、究極の理想はそうなのだということをふまえて授業を考えることは、「歴史総合」の趣旨から考えて望ましいことである。

評価についていえば、反転授業、討論授業を徹底するなら、中間テストや期末テストはやらずに普段の取り組み方だけを評価の対象にすることも可能である。テス

トをやるとすれば穴埋め問題ではなく、歴史家が書いた新書の叙述の一部を批評させる問題や、史料や統計を読み解いて考えるような問題を出すべきで、慣れないと面倒かもしれないが、パターンをつかめば大丈夫である。

そうそう、そのような授業で大学受験に対応できるのか、という批判も出てきそうである。しかし、高校の歴史教育が大転換する以上、大学入試もかわらざるをえない。そもそも教科書自体がかわった以上、それをふまえてつくらなければならない入試問題も必ずかわる。

2011年11月の日本学術会議の提言「歴史的思考力を育てる大学入試のあり方について」では、多様な史資料を読み解く力をはかったり、判断の論拠や方法の正しさを問うなど、望ましい出題方針が示されており、並行する形ですでに大学入試センター試験や、今年度分から始まった大学入学共通テストの試行問題では、今後の入試問題のモデルとなるような、史料の解釈を問うとか、複数の史資料を読み解いて考えさせるような問題が登場している。国公立大の二次試験や、私大の入試でも少しずつであるが多様な出題が増えつつある。ご心配は無用である。

むしろ問題は、2016年5月の日本学術会議の提言「歴史総合」に期待されるもの」で提起された「教員養成と現職研修の重要性」であろう。教科書会社はこうした授業の進め方や留意点を記したマニュアルブックを出版すべきである。プリント作りやテストをしないですめば、教師は教材研究や、様々な討論に対応できる日頃の研修の時間がつくれる。もちろん、煩雑な書類作成や部活対応の時間を減らすことも必要である。「アクティブ・ラーニング」を指導要領に取り入れた責任上、文科省の果敢な対応が強く求められる。

教員の自主的な動きとしては、もうご存知の方も多いと思うが、高大連携歴史教育研究会(<https://kodairekikyo.org/>〈2022年5月31日最終閲覧〉)がある。様々な提言のほか、シンポジウムやホームページを通じて授業実践例や教材の提供にもつとめ、歴史教育改革の最先端を切り開く活動を繰り返している。

かたよらずに根拠をもってモノを考え、議論する習慣が根付けば、公文書やデータの改ざんで組織がゆらぐ可能性や、ヘイトスピーチやフェイクニュースで社会が動揺する可能性を減らすことも、詐欺の被害を減らすことさえ期待できる。「歴史総合」の登場は、高校で学ぶ「歴史」が現実に役に立つものにするきっかけとして、大いに期待できるできごとなのである。

2 「世界史」と「日本史」の融合

いうまでもなく、日本は世界のなかの日本なので、「日本」の歴史も世界全体の歴史と無関係ではありえない。高校の「日本史」「世界史」という科目分けは、近代学校教育そもそもの目的が国民の育成にあり、また、学問としての歴史学が専門性を深めるために細分化を免れないことを背景とした、便宜的な事情によるものに過ぎない。

ところが、日本で生まれ育ち、高校で日本史を選択し、さらに大学受験でも日本史を選択した学生は、世界史は高校で必修科目として1年間学んだだけなので、外

国史に関しては敬遠しがちになる。そして高校では日本史選択者の方がはるかに多いことは周知の事実である。しかしそれでは歴史に関して視野狭窄におちいった人を社会に送り出してしまうことになる。

しかし、ほかの科目との関係上、歴史の科目だけ現在の2倍の単位数を必修にすることは許されない。そこで苦肉の策として近現代史重視で日本史と世界史を融合した「歴史総合」が登場したわけである。つまり、「歴史総合」は視野の広い歴史認識を身につけてもらうことを期待されて登場した。いわれなき偏見や外国人差別を防ぐ効果が期待されるわけで、1の末尾で述べた、歴史教育を「役に立つ」ものにするうえでも重要なことと言える。

しかしながら、教科書末尾の執筆者一覧をみればわかるように、作り手の方が日本史・東洋史・西洋史の研究者の寄せ集めであり、そもそも大学の専門研究者で「世界史」専攻を掲げている人は皆無である。それなのに高校では1人で両方教えるのか。そういう苦情が聴こえてきそうである。

「日本史」「世界史」を隔ててきた「壁」で苦勞する可能性が高いのは、大学で日本史を専攻し、日本史の授業を受け持っている先生方であろう。日本で生まれ育った人の場合、先ほど述べた事情からすれば、教員になるまでに世界史を学ぶのは高校での1年間必修の分だけになる可能性が高いからである。これに比べ、世界史の授業を受け持っている先生方は、高校や大学受験では世界史選択であっても小学校と中学校で日本史を学んでいるのだから壁は相対的に低いはずである。

ではお前はどうかということになるが、筆者はややかわり種で、日本近現代史専攻ではあるが、もともと第二次世界大戦の歴史に興味があったことから西洋史志望だったのに、英語の勉強が好きになれないために日本史志望にかえた経緯があるので、外国史に対する苦手意識はない(もちろん自分で外国史を研究するほどの外国語能力はないが)。そもそも筆者の勤め先は「史学科」で、「日本史学科」ではないので、先述の「史学概論」でも「学問の扉」でも、話題が日本史にかたよらないよう、日本史専攻の学生でも外国史に触れる機会を増やすよういろいろ工夫している。

話をもとに戻して、では「壁」の克服にはどうしたらよいか。山川出版社の『もういちど読む 山川日本史』『もういちど読む 山川世界史』が手っ取り早い対処法であるが、私としては、日本史を受け持っている先生方には小川幸司『世界史との対話』全3巻(地歴社、2011～12年)にも手をのばすことを強くお勧めする。3巻あわせて1000ページをこえるが、著者の高校での授業をもとにしたものなので読みやすく、世界史に触れることが楽しくなること間違いない名著である。「歴史総合」は近現代史重視ではあるが、掘り下げた指導をするためには前近代史に対するしっかりした見識も欠かせない。そういう意味でもぜひ最初からお読みいただきたい。『世界史との対話』に相当する日本史の本はまだないが、それに近いものとしては、網野善彦『日本の歴史をよみなおす(全)』(筑摩書房、2005年)がある。

授業の実践として大事なのは、身の回りの題材でも世界史の話ができるということである。戦場になった沖縄を除き、日本中どこでも可能なのは、出征した兵士たちの慰霊碑(忠魂碑と呼ばれる場合もある)である。学校が所在する地域から徴兵や

召集されて戦死した人々はどこで命を落としたのか。その碑を実際にみて、碑文を読み解けば、立派な「世界史の中の日本史」の授業が成立する。

さらに、その地域の産業に、輸出入と関係しているものがあれば、世界経済とその地域との歴史的なつながりを探ってみることができるし、その地域の近代化の歴史(交通、通信、衣食住)や、学んでいる学校の歴史も世界史との関係で考えることができる。これらは「歴史総合」の教科書の各部の末尾の課題と関連づけて、生徒たちに調べて発表させることができるのである。

筆者は勤め先の大学の付属校の出張講義をしたことが2回あるが、いずれも戦前戦中に地元で刊行された郷土史の本を読み解く授業をおこなった。それらの本のなかには国立国会図書館のデジタルコレクションで誰でもどこでもいつでも無料で閲覧できるものもある。誰が、何の目的である時期にそういう本を刊行したのか。そこで必ず戦没者の話が出てくるのはなぜか。紡績工場があることがわざわざ取り上げられるのはなぜか。災害復旧の話でなぜ自助努力ばかりが称賛されるのか。女性を主題にした話が非常に少ないのはなぜか。掘り下げて行けばその時期、あるいはそれより前の時期の世界の歴史とのつながりが必ず出てくる。そして、それらの痕跡が現在もある場合には、その後の世界の歴史とのつながりについても調査したり考えたりすることができる。生徒たちはもちろん、先生方もより身近に、具体的に想像できるものとして歴史をとらえることができる。

歴史は決して過去のおとぎ話ではなく、今に続くものであることが実感できる。「歴史総合」が、近現代史重視という制約はあるにしろ、日本史と世界史を融合し、かつ、主体的に学ぶ科目として設定されたことで、歴史を今に生かす術を生徒たちは身につけることができるのである。

おわりに

いささか理想論を述べ過ぎたかもしれない。しかし、歴史を広い視野から考える力をなるべく多くの人が身につけることは、社会から偏見をなくす有力な1つの方法であることが、以上の考察からも理解していただけたのではないか。そして、高校生全員の必修科目である「歴史総合」は、それを実現できる科目として、大いに期待できるのである。

この期待を空振りに終わらせるかどうかは、実のところひとえに高校の先生方のご尽力にかかっている。その手間をかけやすいように様々な環境(とくに教科目に関わる研修の時間や材料)が整えられることが大前提であるが、ぜひ新しい科目の成功にお力をお貸しいただきたい。生徒たちが楽しそうに歴史について議論する姿をみるのは教師にとって楽しいものだし、生徒たちも楽しいに違いない。そして、それによって歴史系の科目が、大学受験の手段以外の意味を見出せないただの暗記物ではなく、それを学習した高校生にとって、日常生活にも主権者としての行動にも役立つものとなるはずなのである。

やってみない手はないと筆者には思えるのだが、いかがであろうか。

(ふるかわ・たかひさ／日本大学文理学部教授)